文豪・漱石をしのぶ記念館

漱石夫人は、この5番目の旧居が「熊本にいた間、私どもが住んだ家の中で一番いい家だった」と語っています。

漱石が暮らした家が、当時の場所に残って記念館となっているのは、全国でもこの旧居だけです。庭園には、漱石の句碑や、長女筆子の産湯に使った井戸、寺田寅彦（後に物理学者ですぐれた随筆家）ゆかりの馬丁小屋があり、館内には漱石在熊中の活動が分かる資料など多数展示しています。

この旧居は、昭和53年4月25日熊本市指定史跡となっています。

―― 夏目漱石について ――

漱石は本名を金之助といい慶応3（1867）年、江戸牛込馬場横町に生まれました。幼少年時代、里子、養子と度重なる境遇の変化が漱石の性格形成に大きく影響したといわれています。

明治22（1889）年、正岡子規や菅虎雄、山川信次郎と知り合い、子規の詩文集『七艸集』の批評に初めて“漱石”の号を用いました。

東京帝国大学英文科を卒業し、東京高等師範学校と愛媛県松山の尋常中学校に勤務の後、明治29（1896）年4月13日、第五高等学校の英語の教師として熊本にやって来ました。

五高に4年3カ月勤務し、明治33年、文部省の命により英語研究のため2年間英国へ留学します。

明治36年帰国後一高と東大の講師をしながら、明示38年、高浜虚子の勧めで処女作『吾輩は猫である』を著し、その後『坊っちゃん』『草枕』などの秀作を発表しました。それらの作品をきっかけに朝日新聞社から熱烈な招聘の話があり、文学一本で暮らしたいと思っていた漱石は、明治40年4月、教職を退き同社に入社しました。その後『三四郎』『それから』『門』『こころ』『道草』などの作品を次々と発表し、国民的作家と呼ぶにふさわしい存在として、今もなお多くの人々に読まれています。

明治とともに齢を重ねた漱石は、大正5（1916）年12月9日胃潰瘍のため49歳で死去しました。

参観案内

開館時間	午前9:30～午後4:30
休館日	月曜日（祝日の場合は翌日） 年末年始（12/29～1/3）
入館料	高校生以上200円・小中学生100円 （熊本市内の小中学生・65歳以上等は無料）
所在地	熊本市中央区内坪井町4-22 TEL.（096）325-9127
所管	熊本市中央区手取本町1-1 熊本市文化財課 TEL096-328-2740
駐車場	有（6台程度）

市指定史跡

夏目漱石内坪井旧居

熊本市文化財課

漱石先生、熊本へ

松山で教鞭をとっていた漱石は、熊本の第五高等学校教授になっていた親友菅虎雄に、「五高で使ってくれ」と手紙を送りました。

明治29(1896)年4月13日漱石は、五高の英語の教師として池田停車場(現ＪＲ上熊本駅)に降り立ちました。人力車に乗って新坂から、薬園町の菅虎雄宅へ向かう途中、眼下に広がる市街地を見て“森の都”と言ったと伝えられています。

画:中村 輝美

漱石の五高時代

漱石は五高英語科の教授として比較的平穏な学究生活を送りました。当時の五高には、校長中川元、教頭に桜井房記、英語科主任は佐久間信恭、同僚に生涯の友人菅虎雄、漱石の漢詩の添削をした長尾雨山がおりました。

五高時代から漱石は「教師を辞めて単に文学的の生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり」と正岡子規への手紙にしたためるなど、文学者としての道を考えていたようです。

教鞭を執るかたわら俳句の指導者として、五高生たちと近代俳句の会『紫溟吟社』を結成しました。

明治30年10月10日の五高開校記念式典では、教員総代として「夫レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ…」という祝辞を読んでいます。

3列目右より2人目 漱石
最後列左端 寺田寅彦

五高卒業写真(明治32年)

漱石先生の結婚

漱石は明治29(1896)年6月9日、「光琳寺の借家」で、貴族院書記官長・中根重一の長女鏡子と結婚式を挙げました。

列席したのは、新婦の父親、東京から連れて来た婆や、車夫など総勢6名で、ささやかな結婚式でした。

三々九度の盃が一つ足りないのも、新郎はいっこうに平気で、後に、夫人がそのことを話すと、漱石は「道理で俺たちは、けんかばかりしていたな」と笑ったといいます。

式の費用7円50銭也。

漱石先生父親となる

鏡子夫人と筆子

この家(内坪井旧居)に移ってから、漱石は、ひどいつわりに悩まされていた鏡子夫人を必死に看病しており、そのときの様子を「病妻の闇に灯ともし暮るる秋」と詠んでいます。

明治32(1899)年5月31日、熊本生活3年目に長女筆子が誕生。漱石は、その喜びを「安々と海鼠(なまこ)の如(ごと)き子を生めり」と、少し照れながら詠んでいます。

鏡子夫人は「私が字が下手だから、せめてこの子は少し上手にしてやりたいという、夏目の意見に従いまして『筆子』と命名いたしました」と述べています。現在、筆子の産湯に使った井戸が庭内に残っています。

漱石旧居庭園

漱石先生を慕った寺田寅彦

漱石の教え子であり、熱烈な漱石崇拝者であった寺田寅彦は、「物置きでもいいから是非とも書生においてほしい」と熱心に頼みこみましたが、馬丁小屋の中を見て、さすがに寅彦も住むことをあきらめたと言われています。

小説の素材となった

くまもとの旅

漱石は、同僚山川信次郎などと金峰山麓小天温泉や阿蘇の旅をしています。

その体験から、小説『草枕』や『二百十日』を著し、自然派や西欧文学への批判、金持ちや明治期の近代化に対する憤りなど表現しています。

峠の茶屋

阿蘇の原野